

## 物書きの出自

島田雅彦 (R昭59)



### 略歴

1984年ロシア語科卒業

在学中に『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー  
著書に『彼岸先生』新潮文庫、『彗星の住人』新潮社、  
『フランススコ・X』講談社などがある。

### ハラショー

日活ロマンポルノを見てみたくて、新宿の映画館に行ったものの、窓口のオバさんに年齢を偽っているのを見透かされ、入場を拒否された。やむなく隣の映画館で公開されている「いやらしそうな」映画を見ることにした。それがスタンリー・キューブリック監督の『時計仕掛けのオレンジ』だった。意味不明のタイトル、ペニス・プロテクターを付け、山高帽をかぶった奇怪なファッション、不良少年たちが劇中で使う隠語めいた言葉、早回しのセックスシーン、ミュージカルのパロディになっているレイプシーン、どれもが十三歳の私には劇薬だった。映画館を出た時にはすっかり影響され、劇中で何度も使われていた言葉「ハラショー」を呟いていた。私は中学生の時にはすでに無意識にロシア語を使っていたのである。『時計仕掛けのオレンジ』は私のロシア語学習のきっかけになった。

### 反米少年

冷戦時代の子どもだった私は占領時代の記憶こそないものの、過剰にアメリカ文化の影響を受けることを何処かで拒んでいた。ハリウッド映画やアメリカン・ポップスに熱を上げていた同級生たちへの違和感も手伝い、私なりの反米主義の表明として、東京外国語大学でロシア語を学ぶことにした。英語でも女を口説くことができるが、ロシア語もできれば、世界中の女を口説けるようになると考えたあたりは、冷戦時

代のイデオロギーに相当侵されていたのだろう。外国語を一番効率良く学習する手段は、外国語をネイティブとする異性を恋人にすることである。外国人になり切ろうとするスパイと同じように努力することで、苦行でしかない外国語学習から快樂を引き出すこともできるのである。

### モスクワ

初めてモスクワにやって来た時、私は巨人国に迷い込んだガリバーの気分だった。社会主義に付きものの恐竜趣味と官僚主義は私を憂鬱にしたが、それに加えて、夜の暗さと慢性の商品不足、色彩の欠如に戸惑った。しかし、社会主義の都も一皮剥けば、血の通ったロシア人による独自の経済の営みがあった。

詩人が最も尊敬され、誰もが乾杯の前に小話を披露する国である。酔っ払いも娼婦も文豪の詩の一節を引用したり、意味深な言葉を呟いたりするのだ。また、ほかのどの国よりもいいいたいことがいえる社会のありがたみを知っている。

### 二重経済

闇経済の世界では、実質ドルやマルクなどの外貨との二重通貨制だった。ロシア人の友人は「ルーブルならいくらでもやる」といい、箆筩預金の札束を差し出してくれた。ドルなら何でも買えるが、ルーブルで買えるのはパンくらいだったし、銀行に利子というものがないので、預金の意味はない。要するに箆筩の肥やしにし

かならなかつたのである。かつてのロシアでは、貨幣はどのような形態であってもよかった。アメリカ製の煙草マールポロやパンティストッキングや印刷の綺麗なカレンダーは、代替通貨になっていた。路上でマールポロを掲げると、タクシーも容易に捕まえることができた。救急車が止まり、「今患者がいないのでどこへでも連れて行く」といわれたこともあった。パンティストッキングやカレンダーで様々なサービスを受けることができた。今でこそロシアの通貨ルーブルは、円やユーロのような普通の通貨になってしまい、モスクワは何処よりも拝金主義が横行している。アヴァンギャルド銀行なるものがあり、頭取は二十九歳だとか。社会主義の焼跡にはぶったくり資本主義が栄える。しかし、ルーブルが限りなく紙切れに近かった頃、ロシア人たちは、友情とか善意とか夢とか、実際の貨幣では取引できないものを直接取引する裏技を駆使していたのだ。

#### 地下出版

冷戦時代にロシア語を学ぶ学生だった私が、最も興味を抱いたのが地下出版だった。のちにモスクワで地下出版の実物を見せてもらったが、発禁本のページを撮影した写真を組み合わせたもの、タイプ原稿を綴じたもの、数巻の現像フィルムといった特殊な書籍の形態をとっていた。発禁の小説や詩集は、個々の読者によるボランティアの手作業によって流通した。もらったコピーをもとに、全文をカーボン紙を挟んでタイピングして、一部は自分のもとに置き、オリジナルは返し、あとの二通をもっとも信頼する人にプレゼントする。貨幣経済や出版制度を通さない原始的な流通である。カーボン紙によるコピーそのものが貨幣だった。地下出版の閲覧がバレたら、逮捕、流刑も覚悟しなければならぬ緊張のもと、数万もの読者が危険な好奇心を満たそうとしていた。まさに金では買えないものを信用とともに取引していたのである。

ソ連における言論、出版統制を見ながら、当時の私は日本ではその自由が保証されていると信じていたが、同時に言論、出版の自由は、表

現の多様性を保証するものではないことも学んだ。

今も二〇年前もロシア人は日本人の顔を見ると、カメラや時計やコンピューターを作る技術を賞賛する。それをいわれた方は、確かに技術には長けているが、それを操る魂が抜けていると思う。ある時、モスクワ音楽院の天才コースのピアノレッスンを覗いたことがあったが、何と師匠と弟子は詩の解釈を巡って、議論に熱中していた。ニュアンスの宝庫たるロシア語から、魂の多様性を引き出すのは、詩人やピアニストばかりではない。英語やドルがグローバリズム言語であり、通貨であるなら、ロシア語やルーブルはローカルでありながら、魂の普遍性を持った未来の言語になり、通貨になる潜在性を持っているといったら、プーチンやマフィアは鼻で笑うだろうか？モスクワ市民にとっては、ソ連時代の無計画経済も言論抑圧も悪夢でしかないが、それを耐え抜いた市民の知恵は二十一世紀にも受け継がれなければなるまい。色彩豊かになり、商品と愛想笑いが増えた分、治安が悪くなったモスクワから当時の記憶が消える時、また不吉な歴史が始まるのだろうか？

(しまだ まさひこ・作家、法政大学国際文化学部教授)

